



愛媛県におけるキウイフルーツ病害虫防除暦作成の考え方

愛媛県農林水産研究所 果樹研究センター **あお** **野** **みつ** **お**
青 **野** **光** **男**

はじめに

愛媛県へのキウイフルーツの導入は1970年代ごろから開始されたが、生産過剰から価格が低迷した温州ミカンに代わって1980年代に栽培面積が急速に増加した。導入当初は防除を行わなくても容易に栽培ができるとされていたが、樹齢が進むなどにより病害虫の発生が問題となっている（丹原，1988）。天候不順の影響を大きく受けた2021年は全国2位となったものの、統計の始まった1986～2020年まで35年間および2022年の収穫量は愛媛県が日本一となっている（農林水産省 果樹生産出荷統計）。県内各地に産地が形成されており、2023年の栽培面積は393 haとなっている（農林水産省 耕地及び作付面積統計）。キウイフルーツは栄養に優れ、消費者の購入量が増加している果物であることから、販売単価が安定しており、生産者の意欲も高い。品種は緑色の‘ハイワード’が主体となっているが、一部4倍体の黄色系品種などの栽培も行われている。愛媛県では、県は防除指導資料として農作物病害虫等防除指針（以下、愛媛県防除指針）を作成し、防除暦は農業協同組合（以下、農協）が独自に作成しているという状況であるため、愛媛県防除指針と農協の防除暦について述べることにしたい。

I 愛媛県防除指針について

愛媛県では、薬剤の適正使用や効果的な防除方法を記載した愛媛県防除指針の作成が1960年代には開始されており、原則的に毎年改定を行っている（2003年は未改定）。改定のための検討会は、県の植物防疫関係者や薬剤卸商などが参加して、野菜、作物、果樹に分けて開催される。検討会では、登録変更に関する記載や薬剤耐性の新しい情報などを反映するとともに、掲載要望調査を基に新規の薬剤を評価して採用の可否を決定している。

The Concept of Constructing Kiwifruit Pest Control Calendars in Ehime Prefecture. By Mitsuo AONO

（キーワード：愛媛県、キウイフルーツ、病害虫、防除指針、防除暦）

こうして改定した愛媛県防除指針は一部関係者や関係機関に冊子として印刷して配布するほか、愛媛県のHPにも掲載している。作成が開始されて長い期間の経つ資料であるため、様式の変更は何度も行われているが、近年のキウイフルーツに関する主な記載上の変更点は以下の4点である。①ローテーション散布の参考としてベンゾイミダゾール系や有機リン系といった系統名で記載していた表記をより正確な作用機作分類であるRACコードの記載に2015年から変更、②微生物を用いた薬剤は愛媛県防除指針の最後にある参考資料の中に一覧表で記載していたが、多様なRACコードの薬剤の使用を促すためBT剤は2017年、微生物殺菌剤は2021年からキウイフルーツの項に記載、③効果的な薬剤散布と耕種の防除の実施のため病害虫の特徴・防除上のポイントと耕種の防除法の記載内容を充実、④2016年から魚毒標記から水域の生活環境動植物への影響に変更。

現在の様式では病害虫の特徴・防除上のポイント、耕種の防除法、防除時期、RACコード、薬剤名、一般名、濃度（使用量）、使用時期（収穫前日数）、使用回数、薬剤毒性（人毒・水域の生活環境動植物への影響）、注意事項の順に記載されている。注意事項には、銅剤の薬害を軽減するための炭酸カルシウム剤の加用や薬剤かぶれへの注意などを記載している。また、カメムシ類やかいよう病といった特に重要な病害虫は別ページに生態や防除方法のより詳しい情報をまとめて記載して、防除の徹底を図っている。薬剤の登録濃度には幅がある場合があるが、薬価を低く抑えるため、果樹では防除効果の認められる最も低い濃度を記載することとしている。愛媛県防除指針には適用病害虫名ごとに効果の認められる薬剤を記載しており、農協に属さない生産者や農協の防除暦による防除を行っている中で突発的な発生が見られた場合には、対象病害虫の防除時期が合致する欄の薬剤を選択して使用することとしている。そのため、年間の時期別防除体系を示す「防除暦」という形式とはなっていないものの、対象病害虫に対して防除効果のある薬剤を防除適期に散布することが可能である。

キウイフルーツの記載は1986年から始まっているが、